巻頭メッセージ

複眼

「心の過疎化」からの脱却

秋田経済研究所
理事長　新谷　明弘

「心の過疎化」という言葉をご存じでしょうか？

先日、この言葉の意味を島根県立大学の田中輝美准教授から教えていただきました。「心の過疎化」とは、「地域の現実に目をつぶり、問題が起きると他人事のように振る舞う。地域を持続させるという覚悟もなく、行動を起こすこともなかった。地域に対する誇りを持てず、この不便な地域に未来はないと語ってしまう。」という意識を指す言葉です。このような意識にこそ過疎化の問題の本質があると指摘されているそうです。そして、その背景にはそこに暮らす人々のあきらめがあるとも言われています。

田中さんは島根県出身、新聞記者からジャーナリストに転じ、現在は島根県立大学において「関係人口」研究の第一人者として活躍されている方です。「関係人口」という言葉を最近は目にする機会が増えましたが、田中さんは未だ正しく理解されていないという問題意識から、大学での研究にとどまらず故郷の思い出のある古い建物を購入され、「関係人口」づくりの拠点にするなど精力的な活動をされています。

「関係人口」とは、旅行などで訪れる「交流人口」と移住などの「定住人口」の間に位置する、その地域にさまざまな形で関係するファンの人たちです。地域に関係する人たちは、定住していなくともその地域の価値を再発見し、またしがらみのない立場から地域の抱える問題を解決するきっかけをつくり出してくれます。それにより地域が変わることへつなげていく存在にもなります。

「心の過疎化」からの脱却として私が思い出すのは、五城目町にできた新しい小学校のことです。人口減少にともない子どもが減少し、町内に複数あった小学校が統廃合となり、新たな五城目小学校が町唯一の小学校として誕生しました。昨年、その新しい五城目小学校を見学する機会がありました。

訪問して最初に驚いたのが建物の構造でした。校門はなく入口は吹抜で開放的である一方、入り口に職員室がありすべて見渡せるという学校らしくない構造です。校舎の中は廊下の代わりに広いワークホールがあり、教室を隔てる壁がありません。すべての教室からは町のシンボルである森山をはじめ公園や川、遠くの山など町の姿が見渡せる設計になっています。音楽室では子供たちの元気な声が街に届くよう窓を開放し授業が行われています。新しい小学校のコンセプトは、学校という概念を「越える学校」です。校舎に隣接するメディア棟２階が学校の図書室、１階が地域住民の図書室で、さらに地域住民の生涯学習施設ともつながっています。学校の図書室では親の帰りを待つ児童もいるなど、街と小学校が一体となった開かれた小学校になっています。

当初は、「街なか」から少し離れた広い敷地の中学校隣接地に建設予定だったそうですが、３年間住民参加のスクールトークを重ね、今の「街なか」に建設されました。住民からの「子どもたちの声が聞こえ、元気な姿の見える学校」という要望に応え、まち全体で子どもを育てていくことを目指す小学校になりました。移住された方、町に関係する方、そして長年町に住む方々の声も反映され、設計が見直されたといいます。小学校の統廃合は地域にとって暗い話題となりがちですが、明るくあいさつする子どもたちからも、子どもの声が聞こえることを喜ぶ住民からも、統合のマイナスイメージは感じられません。

人口減少という流れは、さまざまな取組みを通じて抑制する努力が欠かせませんが、社会全体ではこの変化と流れを変えることは難しいのが現実です。私たちは、人が減ることを前提に地域のあり方を考え、暮らしやすさと地域への愛着を維持し続けていくことを両立させる意識転換が必要です。そして、何よりもそこに暮らす人々の活力こそが「心の過疎化」を脱却する唯一の道となります。

卒業から半世紀以上が経過した母校を見学し、一層その思いを強くしました。